

Title	Johann Wilhelm Thomsen, Landleben in der Weimarer Republik
Sub Title	
Author	住司, 憲史(Sumishi, Norifumi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1991
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.60, No.1 (1991. 4) ,p.151- 157
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910400-0151

Johann Wilhelm Thomsen, *Landleben in der Weimarer Republik*, Verlag Boyens & Co., Heide, 1989.

住 司 憲 史

私がここに紹介しようとするのは、ヴァイマル共和国期の地方の農村に住む人々の生活をさまざまな断面を通して描き出した研究である。対象とされている地域は、北ドイツ、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州のハイデを中心とした西海岸ドイツマルシェン地方である。

この時期のドイツは、世界で最も民主的と言われた憲法を持っていたにもかかわらず何故あのように脆く崩壊してしまったのかについて、あるいはナチス体制の成立に際していかなる意味を持ったのかについて深い関心が寄せられてきた。従来の研究は主として政治や経済などの中央に視点を据えたものが多かったといえようが、既に数多くの優れた研究を蓄積させてきている。しかし、

視点を変えて考えてみると、この時期のドイツは、一方において中央からの近代的官僚的な合理化が上からの規定力となって地方や社会の中・下層へと下降し強い影響力を及ぼしてはいくが、他方において農村共同体的な紐帯、伝統的な職業身分観念、あるいは第一次大戦での前線体験者の多くに共通してみられるある種の情念とでもいうべきものが下から押さえつけ難くわきあがってきて、国家の政策や社会組織の内部へと侵蝕していく、こうした相反する二つの力の無限の相互運動と特徴づけることができる。このような上からの規定力と下からの規定力が、いかなる所で出会い、いかなる形で収束するのか、この点を構造的に明らかにすることによって、ヴァイマル共和国期の新たな実像が浮かび上がってくるように思う。言うまでもないことかもしれないが、国家の政治的

事象や経済政策が、そのままの形で無限定に末端の民衆を規定してしまっている訳ではない。むしろ末端の民衆の持つ下からの規定力によって、国家の政策が大きく影響を受けることも少なくない。たとえば、ナチスのスローガンであった「民族共同体」^{フォルクスゲマインシャフト}は、家父長的なドイツの農村共同体の紐帯のありかたを模範としており、その復興を唱えたものであった。また、ナチス体制の初期に制定された世襲農場制や食糧身分団などでモデルとされた「農民」^{bauer}には、先祖伝来の土地を守り、利得よりも労働そのものを重んじる伝統的な農本主義の職業身分観に培われていた。ナチスといえども生産力第一主義や経済的合理主義を民衆に押しつけることはできなかったのである。このような例はそれこそ枚挙に暇がないが、それだけに上からの規定力と下からの規定力の不断の相互運動の関連のなかでヴァイマル共和国の実像を浮き彫りにするためには、当時の民衆の生活や環境がどのようなものであったのが、もっと豊富な材料に基づいて明らかにされなければならない。

ドイツにおいては近年、地方史研究、社会史研究が非常に盛んであり、めざましい成果をあげようになっている。しかしわが国においては、ヴァイマル共和国期に

ついでにこの種の研究は着手されるようになってまだ日も浅く、未開拓の主題も依然数多く残されている。ここに本書を紹介するのも以上のような理由によるものである。

二

著者ヨハン・ヴィルヘルム・トムゼンは、一九三一年、本書の主たる舞台となっているシュレスヴィヒ・ホルシュタイン州のハイデに生まれ、この故郷を題材とした一連の著作で知られている郷土史家である。かつてこの地で自ら農業を営んだ経験の持主の手になる本書においては、彼の祖父母や両親が主題に関係して直接に登場する一方、多数の同時代人に対するインタビューや当時の新聞、雑誌などが豊富に引用されている。それゆえに読者は当時の雰囲気を生き生きと追体験することができる。ここで同書の大きな特色がある。

本書は十一章から成っており、各章がそれぞれ異なる主題を扱うという構成をとっている。まず目次を示すと、つぎの通りである。

Vorwort

1. Von Räten und Einwohnerwehren

2. Wirtschaft und Finanzen 1919-1925
 3. Dat geht all elektrisch!
 4. Die Findeichung des Neufelderkooges
 5. Das Ölkreidebergwerk in Henningstedt
 6. Die Fichtenhain-Rennbahn in Heide
 7. Blausandmaschine und Mergelverbände
 8. Hetze und Gewalt als Mittel politischer Auseinandersetzung
 9. Die Landvolkbewegung
 10. Die Vaterländischen Frauenvereine vom Roten Kreuz
 11. Kultur, Medien und Öffentlichkeit
- (図版、写真、文献リストを含めて一八六ページ)
- 農村におけるナチスのプロパガンダを扱った第七章、農民の自生的な反体制運動であるラントフォルク運動を扱った第八章がとりわけ興味深いので、この二章に重点を置きながら、以下、本書の内容を簡単に紹介していきたいと思う。

三

第一章では、一九一八年十一月に勃発した革命の推移

が論じられ、この革命が地方において持った意味について考察が加えられている。シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州の州都キールで始まった水兵の蜂起は瞬く間に各地に広がり、ハイデにおいても兵士評議会が設立された。トムゼンはその後の経過を翌十九年に各地で結成された自警団の動向にも目を配りながら丹念に追っているが、そのなかで労働者と市民・農民層の対立が浮き彫りにされている。すなわち、労働者が新しい体制をつくりだそうとしていたのに対して、市民・農民層は従来の生活形態を守り、維持しようとしていたのである。著者によると、もしも長期間持続しうるような共和国を築こうとするならば、裁判官をも含めて全ての官吏を左派勢力に属する人々と入れ換えなければならなかったという。また軍も国民軍と呼びうるものに生まれ変わることが必要であった。こうした改革が中央はもとより地方でも着手されなかったために、帝政期の行政官の多くが革命以降も残存し、その結果反民主主義的・反共和国主義的な精神が共和国の官僚機構を支配するに至ったのである。

第二章は、一九年から二五年までの経済と財政が民衆に与えた影響について論じている。破局的なインフレーションによって翻弄され、ヴァイマル共和国への不信を

募らせていく中間層の人々の心の動きがトムゼンの両親などの体験を通して生々しく伝わってくる。

第三、四、七章では、この地方にも及んできた近代化の波が、具体的に取り上げられている。まずホルシュタイン州での電化事業の歩みが紹介されているが、ここからは電気が当時の人々に大きな感動を与え、彼らにとってよりよい未来を約束してくれる象徴的な存在であったことがわかる。続いて西海岸地方で行われた干拓・堤防建設および土壌改良の試みが話題とされているが、この部分からは先進的な農民達が最新の機械を導入して農地拡大を押し進めていた様子を知ることができる。

第五章では、ナチス政権期をも射程にいれ、地方の産業が中央の需要によって翻弄された状況がドイツマルシェンにおける石油産業の歩みを通して語られている。

第六、十、十一章では、農村文化が扱われている。ヴァイマル共和国時代は文化的にきわめて多産で活発な時期であったが、その現象は大都市に限られていた訳ではなく、ドイツマルシェンのような農村地帯においても同様にみられたのである。たとえば、繋駕速歩（一人乗り二頭立て二輪馬車）、オートバイ、自動車などのクラブがつくられて盛んにレースが行われ、農村の人々の人

気を呼んでいたと言う。またこの地方の女性の文化・社会活動も取り上げられており、それは赤十字祖国婦人連盟の歩みを通して語られている。その他に、新聞、雑誌、市民大学、芸術連盟、美術展覧会、ラジオ放送、映画上映などが紹介されているが、そこからは当時の農村における文化が、意外な程に多彩であったことがわかる。

第八章「政治対決の手段としての扇動と暴力」では、この地方におけるナチスの進出が描かれている。こうしたナチスの末端における地方組織の活動は、ナチスが民衆を把握しようとする側面と、民衆がナチスを選択しようとする側面とが触れ合う、いわば結節点ともいうことができる。まず著者トムゼンは、今日の政治活動とヴァイマル末期のそれとのあいだにある相違を指摘する。彼によると、政敵を攻撃するために当時用いられていた粗野で扇動的な言辞は、今日では容易に理解し難いほどに凄まじいものであった。ついで著者は、この地方へのナチスの浸透を具体的に明らかにするために、元牧師のナチス党弁士ルートヴィヒ・ミュンヒマイヤーの活動に触れている。彼は第一次大戦後、北ドイツを中心に反ユダヤ主義的な説教をして活動していたが、ドイツ・フェルキッシュ自由党の結成とともにこれに入党、しかし二八

年にはナチスに鞍替えし、その後は各地でセンセーショナルな演説をおこなって民衆を扇動した人物である。彼はフレンスブルクやハイデの集会にも登場して、その激しい言辞を弄する演説のために政府閣僚侮辱と共和国誹謗の罪に問われた。だがこれらの演説の後、たとえばハイデ地方支部には二五人もの新入党員がみられた事実からは、ミュンヒマイヤーが卓越した扇動家であったことが窺われる。彼は公判で反ユダヤ的な発言を盛んに繰り返したあげく、結局無罪となった。ミュンヒマイヤー自身の言葉によると、彼は同様の罪で五一回も起訴されたが、全て無罪判決を勝ち取ったという。ここで止目しておくべきは、裁判さえも巧妙に自己の宣伝の場に変えてしまうミュンヒマイヤーの老獪さは、彼の特殊な個性のみに帰することはできず、ある程度多くのナチス党弁士達にも共通するものであったという点であろう。

トムゼンは、二九年にヴェールデンで起きたナチス党と共産党の衝突にも言及している。同年三月七日に同地でナチスの集会が開催されたが、夜にはいると両者が乱闘を始めたため、それはナチス党員二名、共産党員一名が死亡する惨事に発展した。この時、興奮した参加者と警察が一触即発の事態を迎えたが、党の幹部は冷静に対

応した。発砲も辞さない姿勢を見せる警官の隊列を突破しようとする人々を強引に押し戻し、ナチス大管区長自らが彼らの説得につとめたので、衝突は回避された。この例にみられるように、ナチスは単に民衆を扇動するだけではなく、このような細心さをも持ち合わせていたのである。

ヴァイマル共和国は一応民主的な選挙が行われていたという前提で語られる場合が多く、またそれは必ずしも誤りではない。しかし、トムゼンが「多年にわたる扇動は憎悪をかきたて、暴力の芽を育んだ」と述べているように、政治的暴力が日常化していた時代でもあったという点も同時に銘記しておくべきだろう。全国的にみてもナチスは三二年までに他の政治組織との乱闘などで約二百名もの死者をだしていたし、社会民主党系の国旗団ライヒスバナーも同じ頃までに六十余名の命を失っていた。当時の人々が派手な扇動や暴力に次第に不感症になっていったことは、容易に想像される。ナチスはこのような状況のなかで官憲に弾圧の契機を与えないように配慮しながら、党員には乱闘騒ぎで日頃のうさを晴らさせ、同時にそのようなテロ行為で他の政治組織を萎縮させる一方、死者を英雄として偶像視して、宣伝に巧みに利用したのであった。

この章からは、ナチスが扇動や暴力の行使にきわめて長けていたとの印象を受ける。

第九章では、二十九年以降にシュレスヴィヒ・ホルシュタイン州を中心に広がったラントフォルク運動が論じられている。この運動は既成の政治組織とは全く無関係に始まったにもかかわらず、その主張にナチスの先駆けともいえるような共通性をそなえていたので、結果としてナチスの抬頭を準備するような役割を果たした。事実、運動が失敗に終わると、その支持者は大量にナチスに流れ、国会選挙におけるナチスの得票率は飛躍的に増大したのである。

農村の大部分の人々は、一九二〇年代においても、依然として第二帝政時代の国家主義的な価値観や情熱のなかで生きていた。ところが敗北に終わった戦争、そしてそれに続くヴェルサイユ体制とインフレーションは、農民を激しく動揺させた。彼らの持っていた価値の全てが脅かされているように思われたのである。トムゼンはラントフォルク運動とナチスを培った土壌は共通のもの、すなわち政治的故郷の喪失と経済的困窮であったと指摘しているが、これにさらに悪条件が重なった。たとえば彼らは凶作と家畜の疫病に見舞われて、重い負債を背負

い込んだのである。また、この地方では農業組織も三つに分立して統一もままならず、農民のインタレストを広範に代表しうる組織は存在しなかった。こうした状況のなかで、ラントフォルク運動は確固とした構成員も、選出された幹部もないままに展開していくが、ナチスとは敵対的な関係にあり、ナチスの側でもこの運動への党員の参加を禁止するという態度をとった。経済恐慌の進展とともに差し押さえや強制競売が増加すると、ラントフォルク運動のエネルギーはそれらの阻止に向けられたが、こうして運動は次第に反体制運動の色合いを強め、それにともなつて逮捕者を続出させていった。運動はやがて数件の爆弾事件を引き起こすにいたり、その裁判を境に勢いを失っていった。トムゼンは運動の衰退の原因を組織の脆弱さに加えて、それが反体制運動にとどまり、建設的で具体的な目標を掲げることができなかった点に求めている。人々は今や単なる反体制運動以上のもの、すなわち明確な綱領を備えた政党を欲するようになっていたのであり、ここに強力な民族国家の建設を謳ったナチスがラントフォルク運動の衰退によって生じた空白に浸透することができた理由があった。このような著者の指摘自体は特に目新しいものとはいえないが、前述の爆弾

事件裁判の経過やそれについての新聞報道に関しては豊富な材料が提供されている。

四

トムゼンの本書全体を通しての意図は、序文において窺われるように、ヴァイマル期のドイツを、一方において、ヴァイルヘルム第二帝政期の古い在り方になお引きずられ、他方において経済・社会・文化の面では近代化による大きな変化にさらされている、そういう混沌とした時期として扱おうとすることであつたと思われる。電化の開始、干拓地の建設、レースへの人々の熱狂などを素材に選んだのもそのような意図からであろう。こうした過渡期を扱うが故に、その叙述がヴァイマル期だけに限定されず、しばしば第二帝政期や第三帝国期へと筆が及ぶのも大いに納得できる。

ただそれだけに各章のそれぞれの主題において、古いものと新しいものとのせめぎあいについてもっと突っ込んだ考察が欲しかったところである。私は冒頭において上からの規定力と下からの規定力の相互浸透性への着目の必要について述べたが、残念ながら本書においても、きわめて豊富な材料の提示がなされているにもかかわら

ず、このような歴史の構造に対するの洞察には物足りなさを感じる。

ただ本書にはこのような不満は残るものの、わが国においてほとんど知られていない、ヴァイマル共和国期における農村の民衆生活の実際について、きわめて精彩な事実の提示があることには変わりはない。わが国のヴァイマル共和国研究が、まだまだ底辺の視座からのものが少なく、底部の広がりについての掘り起こしが、これからの大きな課題である点を思えば、このような研究の公刊は大いに歓迎すべきであると思う。